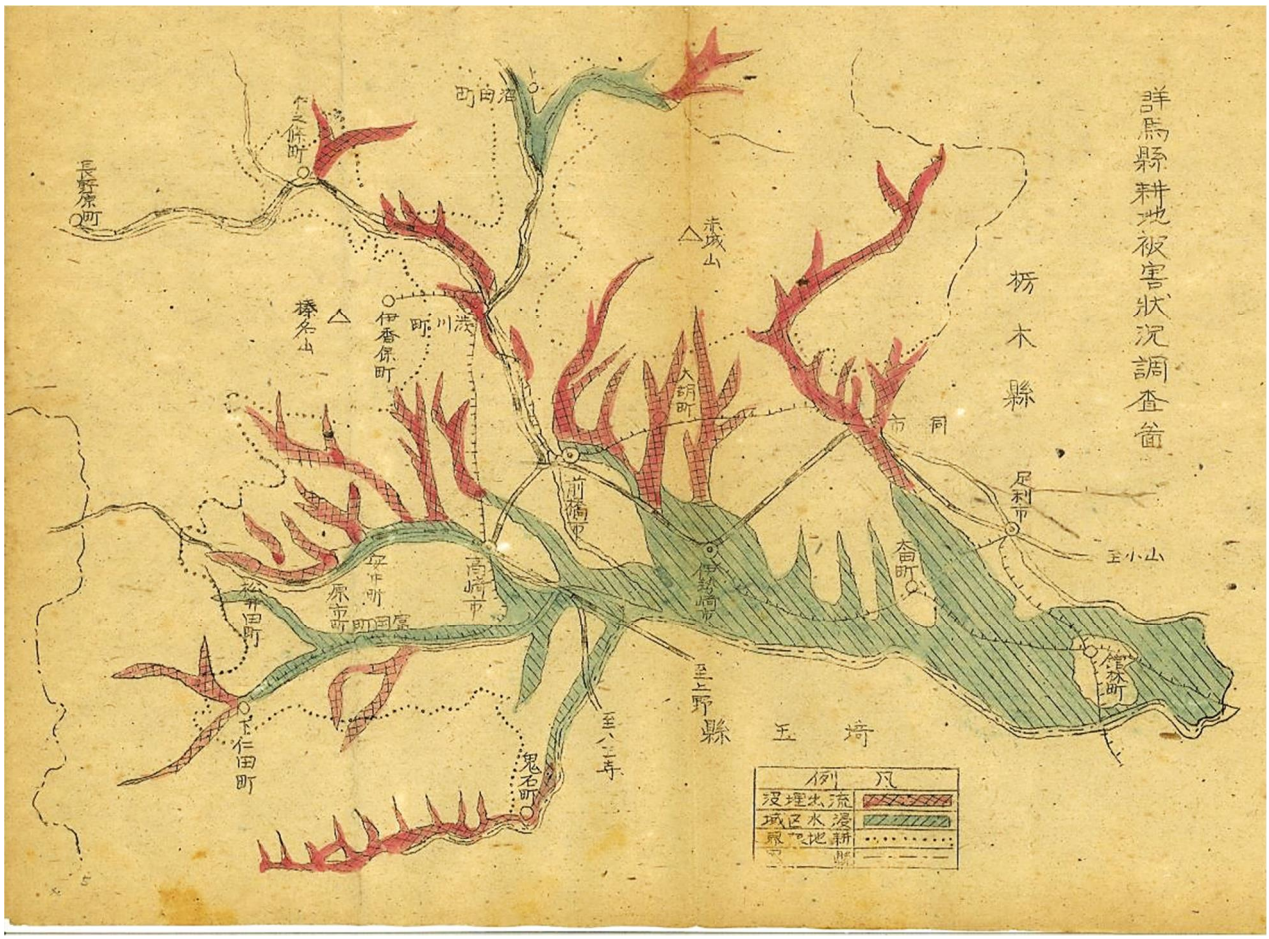

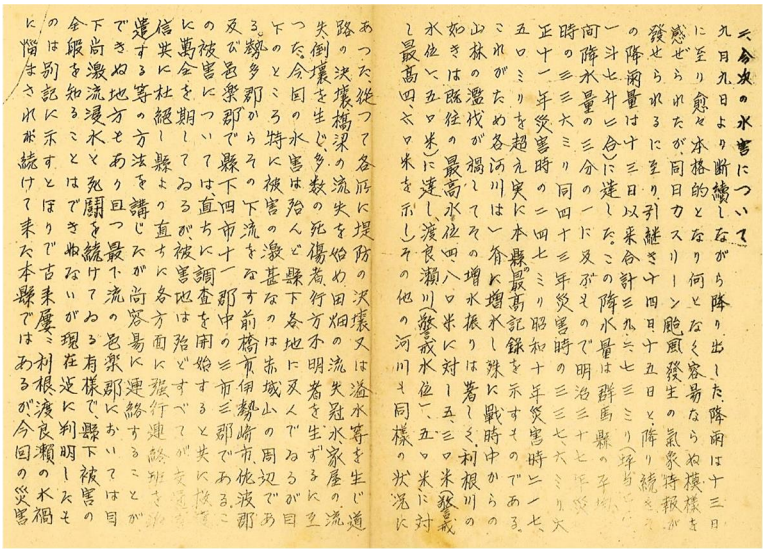

今次の水害について

九月九日より斷續しながら降り出した降雨は十三日に至り愈々本格的となり何となく容易ならぬ模様を感ぜられたが、同日カスリーン颱風發生の氣象特報が發せられるに至り引續き十四日十五日と降り續き[illegible]一斗七升ニ合)に達した。この降水量は群馬縣の平[illegible]間降水量の三分の一に及ぶもので明治三十[illegible]時の三三大ミリ同四十三年災害時の三三七六ミリ大正十一年災害時の二四七ミリ昭和十年災害時二一七五ミリを超え実に本縣最高記録を示すものである。これがため各河川は一斉に増水し殊に戰時中からの山林の濫伐が禍してその増水振りは著しく利根川の如きは既往の最高水位四八〇米に対し五三〇米(最高水位に五〇米)に達し渡良瀬川(警戒水位一、五〇米に対し最高四、六〇米を示しその他の河川も同様の狀況に

あつた從つて各所に堤防の決壞又は溢水等を生じ道路の決壞橋梁の流失を始め田畑の流失冠水家屋の流失倒壞を生じ多數の死傷者行方不明者を生ずるに至つた。今回の水害は殆んど縣下各地に及んでゐるが目下のところ特に被害の激甚なのは赤城山の周辺である。勢多郡からその下流をなす前橋市伊勢崎市、佐波郡及び邑楽郡で縣下四市十一郡中の三市三郡である。この被害については直ちに調査を開始すると共に救[illegible]に萬全を期してゐるが被害地は殆んどすべてが交通[illegible]信共に杜絶し縣よりの直ちに各方面に飛行連絡[illegible]選する等の方法を講じたが尚容易に連絡することができぬ地方もあり且つ最下流の邑楽郡においては目下尚激流漫水と死闘を続けてゐる有様で縣下被害の全貌を知ることはできぬないが現在迄に判明したものは別記に示すとほりで古来屢々利根渡良瀬の水禍に悩まされ来り続けて来た本縣ではあるが今回の災害

17 群馬県を襲ったカスリーン台風の被害

昭和22(1947)年

本資料は、昭和22年(1947年)9月13日から15日にかけて群馬県を襲ったカスリーン台風による被害状況を群馬県庁が取りまとめた文書です。

前橋測候所で観測された3日間の降雨量は合計392.7mmに達し、利根川の水位は最高5.3mを記録しました。これは当時、明治以降で過去最高の水位とされました。

また、戦時中から続いた山林の過度な伐採(濫伐)により流域の保水力が低下していたことから、各地で増水が著しく、利根川・渡良瀬川などの堤防が相次いで決壊し、甚大な水害が発生しました。

県内では家屋の流失・倒壊が多数にのぼり、資料作成時点での人的被害は死者592名・行方不明者107名と記録されています。

群馬県行政文書『昭和22年9月大水害の概要』(A0384A0G 1837)

群馬を襲った未曾有の災害 — カスリーン台風

戦後復興の途上にあった昭和22年9月14日、カスリーン台風が日本本土を直撃し、翌15日に鹿島灘へ抜けるまで豪雨が続きました。これにより赤城山南面の崩壊や河川の氾濫が発生し、県内各地は未曾有の被害を受けました。台風に伴う湿った空気が停滞前線に流れ込んだことで降雨量がさらに増し、赤城山麓では多数の土石流が起こり、大胡町・富士見村を中心に甚大な被害をもたらしました。

また、渡良瀬川や粕川・広瀬川でも決壊や越水が相次ぎ、広範囲で浸水が発生しました。さらに昭和23年にはアイオン台風、昭和24年にはキティ台風が上陸し、群馬県は3年連続で台風災害に襲われました。これらの一連の経験は、後の群馬県における治水・防災政策の重要な原点となりました。